

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

酒 詰 仲 男

目 次

- I 遺跡について
- II 遺物について
 - a 自然遺物
 - b 人工遺物
- III 人骨について
- IV 総括
- V 文献

I 遺跡について

樺太に所在したと言われる貝塚は次の24箇処である。

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

[illegible]

別稱

所在地(旧名)

1	東タライカ貝塚	タライカ近傍貝塚
2	西タライカ貝塚	
3	栄浜貝塚	栄浜歡喜寺裏貝塚 歡喜寺裏貝塚
4	胡蝶別貝塚	
5	鈴谷(北)貝塚	
6	鈴谷(北)貝塚附近貝塚	
7	鈴谷(南)貝塚	ソロウイヨフカ貝塚 ソロウビヨフカ貝塚 新庭灣岸附近貝塚 新場、附北貝塚 鈴谷、ヤ貝塚 鈴谷(北)貝塚(誤)
8	江ノ浦貝塚	
9	遠節貝塚	トブシ貝塚
10	北本斗貝塚	金子漁場貝塚
11	本斗駅構内貝塚	
12	本斗大通貝塚	大通貝塚
13	本斗浜通貝塚	
14	本斗南浜町貝塚	

敷香郡東タライカ
 同郡 西タライカ
 同郡 栄浜町歙喜寺裏
 長浜郡胡蝶別海岸
 豊原郡千歳村大字北貝塚
 豊原郡千歳村大字北貝塚
 太泊郡新場村大字貝塚

留多加郡河東村江ノ浦
本斗郡本斗町遠節水源地
同郡同町 北本斗金子漁場内
同郡同町 本斗驛構内
同郡同町 大通七、八、九及一〇丁目に亘る
同郡同町 浜通八丁目
同郡同町 南浜町二丁目金比羅杜下

- | | | |
|----|-----------|---------------------|
| 15 | 遠節良音間神社貝塚 | 本斗郡本斗町遠節、良音間神社 |
| 16 | 遠節二番地附近貝塚 | 同郡同町遠節二番地附近 |
| 17 | 本斗小学校々庭貝塚 | 同郡同町小学校々庭 |
| 18 | 吐鯰保貝塚 | 同郡吐鯰保 |
| 19 | 北内幌貝塚 | 同郡北内幌 |
| 20 | 内幌貝塚 | 同郡内幌北浜通弁天社裏 |
| 21 | 藻白貝塚 | 同郡好仁村白牛字藻白、藻白川右岸 |
| 22 | 宗仁貝塚 | 同郡好仁村大字宗仁、宗仁川々口右岸 |
| 23 | 北古丹貝塚 | 同郡海馬島北古丹 |
| 24 | 南古丹への途中貝塚 | 同郡同島北古丹より南古丹への途中の貝塚 |

樺太の貝塚については、多くのものが、未だ不完全な報告しかない状態で、終戦となつてしまつた。今こゝに知られている限りのことを記して置くとすると以下の如くである。

1 東タライカ貝塚 敷香郡東タライカにある。文獻17によると宮内郡となつてゐる。一般にタライカ貝塚と言うと、東西いずれのタライカを指すか不明で、適当でないが、文獻42・48にはこの東タライカ貝塚のことにしている。又タライカ近傍貝塚と記したものもある（文獻45） 樺太の太平洋岸に、拇指を一本だけ開いたように延びてゐるのが知床岬で、他の指に当る部分との間に、大きく彎曲したタライカ湾を抱いている。その中央の辺は北緯44°位であるが、その北側に多米加湖があつて、海との間に東からと、西からと長い砂洲が延び出して来て、互に食い違つて重なり合つてゐる。東側のものは外洋側にあつて、細長く、西側のものは内側の多米加湖に面してゐて巾が広い。東タライカ貝塚（小貝塚群である）は、その前者の砂嘴の基部附近にあつて、無数の竅穴に附屬しており、北方多米加湖を指して分岐した

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

小砂嘴上に独立した貝塚もある。甲野勇が発掘したのはその先端部である。同氏等の文献⁴⁸によると、貝塚は湖に沿うて³⁰、米に亘つて存し、貝塚の面は湖面より^{3,4}米高いと言う。そして貝塚の一部は湖底にも沈んでいる疑いがあるとも言う。貝塚の表面はカヤに似た雑草に蔽われ、各所に濫掘の跡も見られる。甲野等の発掘成績に徴すると、表土20糎、純貝層70糎、混貝砂層10糎、貝層7糎で、貝層が上下二層になつていた処もあり、或は表土20糎、純貝層70糎と言うところもあつた。堅穴は東タライカアイヌが越冬に用いたもので、幕末から明治初年位に及ぶ新らしいもので、明治三八年（一九〇五年）悪性感冒の爲廃棄されたものと言う。

2 西タライカ貝塚

敷香郡西タライカにある。この方は未だ東タライカ貝塚程学術的に調査されていない。前述西側の砂嘴の基部にある西タライカ村の東北約4料のところにあつて、多米加湖から侵入して来る狭長な湖の最奥位にそれに面して存する。阿部善吉が発見したもので、ツンドラが深く発掘は困難であつたと言う。然し砂洲の上にある点、遺物から見ても、東タライカ貝塚と、その特質は大差なきものと考えられる。附近にまた堅穴もある。

3 栄浜貝塚

豊原郡栄浜歙喜寺裏にある。多米加湖の西岸が蜿々と延び出して南下し、それが東南転した地点附近にある。砂浜に突出した低平な舌状台地の上に七個の堅穴があり、貝塚はこれに附属している。この舌状台地の基部には溝が掘られていて、台地全体がチャシになつている。概括して台上砂層に存する堅穴に附属した貝塚の一類である。嘗て豊原考古学会で調査し、また清野謙次博士も発掘調査した。

4 胡蝶別貝塚

（てちよらべつ）

長浜郡胡蝶別の海岸にある。樺太の南端部がY字型に分岐する、その両短枝に抱かれたのが亜庭

湾であつて、その東側が特に東湾とも呼ばれる。東湾は北側と東側とが直線的で、その両岸の交叉点に本遺跡がある。

この地域では砂洲の断崖に小流がかかつているような箇所を除き、砂洲の開けた所や、小川の川口等には点々と小貝塚がある。胡蝶別貝塚と言うのは、こうした貝塚群の概称であつて、特にその調べられた部分を指して、報告されたに過ぎない。

5 鈴谷（北）貝塚 馬場脩、大場利夫博士等は本貝塚が、坪井正五郎、清野謙次両博士が発掘したはずの鈴谷（北）

貝塚と思つてゐるらしいが誤である。筆者も資料篇で、かく信じ、その様に記述したが、諸報告を精読して見ると、誤りであることが判つた。坪井博士等が調査したのは、次に記す鈴谷（南）貝塚で、清野博士が掘つたのは北貝塚の方である。本貝塚は北貝塚附近にあり、ス、ヤ川々口から約二軒上流にある。最後迄貝層が残つてゐた為、馬場脩もこれを調査し、坪井博士のス、ヤ貝塚もこれであつたと早合点したものとされる。ただ両貝塚は遺跡の上でも、また遺物の上でも酷似していたものと思われる。清野博士の報告（文獻20）によると、貝層が上下二層のところもあり、最上層は近代のものであつたらしい。文獻51aによると九層あつたとも記している。

6 鈴谷（北）貝塚附近貝塚 豊原郡千歳村鈴谷（北）貝塚附近に点々とあつて、石器時代の遺物が全くないか、殆んどない貝塚を概称して、かく呼ぶと文獻38にある。かゝる種類の貝塚は、もとより（南）貝塚にもあつたものと思われるが、その方ではかく区別されてゐない。

7 鈴谷（南）貝塚 太泊郡千歳村大字貝塚にあり、鈴谷（北）貝塚に対して特に（南）貝塚と呼ばれる。附近に存した種畜所の所員釜沢某が発見し、それによつて飯島魁博士が実査し、引いて坪井正五郎博士の発掘調査した次第は清野博士が述べている通りである（文獻56）。「コルサコフ（大泊）の北約三里、ソロウイヨフカ（新場）の山里の静さを踏まんとして、通側約二丁に亘り白き或は灰色の貝壳あり」云々と、最も古き文獻1にあり、文獻3には「コルサコフの北方（原文東方とあるは誤）著者）約三里にソロウイヨフカと言う所がある……東方背後に聳峨たる山系……前景は稍平坦である。処々に水の停滞した窪地があるが、それは当時の堅穴の跡だと言う」とあり、文獻4には「海岸から一丁乃至数丁はなれて第三紀以後の低い海岸隆起段丘がある。この段丘の半腹か又はその周囲、若しくはその下の海岸に近く数カ所の貝塚がある。予等よりも先に飯塚教授がこれを発掘し……」とあり、文獻5には「亜庭灣の行きどまり……岸から東の方へ五、六丁、丁度沼地から乾いた土地へ移ろうとする境目のところで大貝塚の発掘に従事していた」

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

とある。以上によつて見るに本貝塚は海岸に面した段丘上にあつて、清野博士が実査した頃には既に畑の上に点々と貝殻が散布しているに過ぎなかつた。馬場脩（文獻56）は「ス、ヤ貝塚は新場駅（この駅名稍疑問―著者）を去る南西約十五、六丁を去る、大泊郡千歳村北貝塚十三番地を中心とする地点に当る。留多加街道を左折して、行くこと五、六丁で……位置は鈴谷川、の東岸に位し……」（点著者）本貝塚は明治廿九年、此の附近にあつた種畜所の所員釜沢氏の発見にかゝるもので、明治四十年坪井博士一行がス、ヤ貝塚の名称を附したものであるが、その後ス、ヤを鈴谷と漢字に改め、鈴谷貝塚と通称さるゝに到り、他名南貝塚に対して北貝塚ともよばれている。貝塚の面積は約一町四方位……坪井、清野両博士の発掘もこの地域になされたもので」（文獻56―二三乃至三三頁、四頁にも同じ記載がある）云々と述べている。明にこの記載は、北、南両貝塚を混同したものである。（南）貝塚は別名ス、ヤ貝塚、鈴谷貝塚、ソロウイヨフカ貝塚、ソロビヨフカ貝塚、ソロウイヨフカ近傍貝塚、新場駅附近鈴谷貝塚等と呼ばれている。とも角従来有名な鈴谷貝塚はこの方である。

8 江ノ浦貝塚 留多加郡河東村江ノ浦にある。ス、ヤ川々口を渡つて、留多加街道を西進した海岸沿にある。新岡武彦は、これを太泊郡所在としているのは誤りである（文獻32―三三三頁）。

9 遠^{とぶし}節貝塚 本斗郡本斗町本斗遠節水源地沢にある貝塚で、間宮海峡に臨む西海岸方面では、その最北の貝塚である。文獻7にトブシと言う包含地の名があげてあるのも、同じ遺跡のことであろう。文獻56及斎藤弘吉は水源池沢貝塚と記載している。附近に又堅穴が存する（文獻22）。

10 北本斗貝塚 本斗郡本斗町北本斗金子漁場内にあり、文獻22に貝塚は原形の一部を存するのみとある。以下17迄の八箇の貝塚は悉く、本斗町の貝塚であるが、本斗の詳細不明の為、その順位はなお仮定である。

11 本斗駅構内貝塚 本斗郡本斗町本斗駅構内にある貝塚。駅は本斗町の北端にあると言うから、この順位に置いた。

12 本斗大通貝塚 本斗郡本斗町大通七、八、九及一〇丁目に亘る貝塚。文献22によると二カ所に貝塚があつたらしいが、現存しないと言う。

13 本斗浜通貝塚 本斗郡本斗町浜通八丁目にあるもの。単に浜通貝塚とも呼ばれる。調査をしながら、木村郷土研究所を経営した木村信六によつて、この附近の貝塚は細かく調査された。氏によると(文献41・56)本貝塚は、海岸線を去る40米余、標高2米、海岸へ向つて緩傾斜をした宅地内にあつて、一部は畑地となつている。貝殻が露出していないのと、家屋のためよく解らぬが、長軸南北15米の長方形を為すらしく、中心は5米程で、東端表土15糎の下に貝殻点在、西へ寄ると貝層厚さ10糎ばかりで、灰及木炭を混じていたと言う。

14 本斗南浜町貝塚 本斗郡本斗町南浜町二丁目金比羅社下の貝塚。南浜町貝塚とも、金比羅社下貝塚とも呼ばれる。やはり木村信六が調査したもので、貝塚附近の標高9米、境内であるが、畑地にもなつていて、貝殻の散布は夥しい。貝塚の一部が、鉄道工事にとられ、貝層が露出している。骨角器の多い木村A地点は、表土15糎で遺物なく、A層(35—40糎)は植物繊維を含んだ赤褐色砂層、無文並に刻文土器があり、B層(30—40糎)は混貝砂層で、無文、刻文、捺型文土器で、獸魚骨多量にあり、C層(50糎)は赤褐色砂層でウニの三層があり、捺型及棒太式縄目文土器と無文土器を出し、D層(C・E中間)は無文及棒太式縄目文土器を出し、E層(60糎)は、赤褐色砂層で、少量の無文並に棒太式縄目文土器を出す。以上のうち骨角器の多いA層が中心で、これからは牙偶も出土している。

15 遠節良音問神社貝塚 本斗郡本斗町遠節良音問神社附近貝塚、これも木村信六が調査したものであるが、吐鯤保貝塚の向いにあると言う以外、詳細は予には不明である。

16 遠節二番地附近貝塚 本斗郡本斗町遠節二番地附近にあるもの。これも詳細は不明である。

17 本斗小学校々庭貝塚 本斗町の小学校の位置も不明であり、遺跡の詳細も不明である。

18 吐鯤保貝塚 本斗郡吐鯤保貝塚。本斗郡二丁目貝塚の対岸にあると言うのみで、詳細は不明である。文献22に

貝塚資料より見たる棒太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

よると、貝塚は原形を損ずとある。附近に堅穴もある由である。以上で本斗町附近の全貝塚の記載を終つた訳であるが次の四箇処の貝塚も、これ等と余り遠く距たることなく、南に分布している。

19 北内幌貝塚

本斗郡北内幌にある貝塚である。但し文献22によると、遺跡は原形を止めずとあり、附近に堅穴もあると云う。

20 内幌貝塚

本斗郡内幌字北浜通、弁天杜裏にある貝塚。文献22によると原形を損ずとあり、附近にこれまた堅穴があると言う。

21 藻白貝塚

本斗郡好仁村白牛字藻白、藻白川の右岸にある貝塚。遺跡の詳細は不明である。別名白牛貝塚とも呼ばれる。

22 宗仁貝塚

本斗郡好仁村大字宗仁川々口右岸にある貝塚。貝塚の詳細は不明であるが、附近の共同牧場から遺物の項に記す宗仁式土器が出ている。

23 北古丹貝塚

海馬島の貝塚である。本斗郡海馬島北古丹にある貝塚。詳細は不明。文献^{46a}によると、附近に堅穴もあると言う。

24 南古丹への途中貝塚

やはり海馬島の貝塚。松本彦七郎博士が、南古丹へ行く途中で見かけたと言うのみ。勿論地名等も確かめられないのが当然であろう(文献18)。

註1 拙著「樺太の貝塚」昭二九・九参照。

以上を概観するに、東タライカ、西タライカ、鈴谷(北)、鈴谷(南)の諸貝塚は海岸の砂丘上にあり、江ノ浦貝塚も略同様のものと推察される。柴浜貝塚だけが、現海岸線と稍離れた、舌状を為した海岸砂丘上にある。間宮海峡側の諸貝塚、遠節、北本斗、本斗駅構内、本斗大通、本斗浜通、本斗南浜町、遠節良音間神社、遠節二番地、本斗小学校々庭、吐鯤保、北内幌、内幌、藻白、宗仁の諸貝塚については、本斗南浜町の外殆んど遺跡について詳記したものがない。

が、大体海岸の直側に高い崖があつて、その上に堆積した砂丘上にあるものらしく、唯遠節の諸貝塚のみが、海岸から入り込んだ小さい谷に臨んであるものらしい。海馬島の二貝塚も、砂丘上にあるらしいが、詳しいことは不明である。

胡蝶別貝塚のみは堅穴に附随する小貝塚群で、この種の貝塚群は多くの他の遺跡にも存するものらしいが、悉くは記録されていない。堅穴自体が、近世アイヌ等の住居跡で、余り新しい為に、問題にされないらしい。

層位関係の明かなのは、東タライカ、鈴谷(北)、北本斗南浜町の三貝塚のみで、此等の貝塚の最上層には、やはり近世土人の諸遺物が発見される。

鈴谷(北)貝塚、遠節貝塚の外、砂丘の遺跡の場合飲料水をどうしたものであろうか。砂丘にも湧水点があるのであろうか。これも詳記されていない。恐らく砂丘を流れる小河川が水源で、晩秋から、初春迄は氷雪が水源となり得るし短い夏季だけなら、稍遠い地点から舟で水を運んでも、こと足りたものである。いずれにしても、貝塚が遠く海岸線から離れていないと言うのが一つの特徴である。但し新しい堅穴群に伴うものはこの限りではない。

Ⅱ 遺物について

a 自然遺物

自然遺物には貝類、獸類、鳥類、魚類、ウニ類、その他がある。

イ 貝 類 Mollusca

貝類の資料は東タライカ、西タライカ、鈴谷(北)、鈴谷(南)、本斗浜通、本斗南浜町の諸貝塚に資料がある。

目 録

腹足類

- 1 ヤマトニシ類
- 2 タマキビ
- 3 エゾタマキビ
- 4 エゾタマガイ
- 5 ツメタガイ
- 6 タマツメタ
- 7 ヤナギ

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

ノイト 8 ヒメエンボラ 9 エンボラ

斧足類

10 イガイ 11 ホタテガイ 12 スミノエガキ 13 マガキ 14 カキ類 15 エゾイシカケガイ 16 アサリ 17 パカ
ガイ 18 ウバガイ 19 オノガイ

記 載

1 ヤマタニシ類 *Cyclopholus* sp. 鈴谷(南)貝塚出土(文献4—一六四頁)。

2 タマキビ *Litorivaga brevicula* (Philippi) 東タライカ貝塚出土(文献52)。次のエンタマキビの誤定か、略称か。

3 エンタマキビ *L. squalida* Broderip et Sowerby 東タライカ貝塚(文献48—五三頁、文献56—三三頁)、西タライカ貝塚(稀、文献48—一六八頁、文献56—三三頁)、鈴谷(南)貝塚(著者同定、東大人類学教室資料)出土。

4 エンタマガイ *Natica jantosthoma* Deshayes 鈴谷(南)貝塚出土(文献4—一六四頁)。

5 ツメタガイ *Neverita* (*Glossaulax*) *didyma* (Röding) 本斗浜通貝塚出土(文献41)。或はエンタマガイの誤定か。

6 タマツメタ 鈴谷(北)貝塚出土(文献42—三三八頁)。

7 ヤナキノイト *Siphonalia* (*Cassidariaformis*) *ornata* A. Adams 鈴谷(南)貝塚出土(文献4—一六四頁)。

8 ヒメエンボラ *Neptunea* (*Barbitionia*) *arthrica* (Bernardi) 鈴谷(南)貝塚出土(著者同定、東大人類学教室資料)。

9 エンボラ *N. lyrata* (Gmelin) 鈴谷(北)貝塚(文献42—三三八頁)、本斗浜通貝塚(文献42)、本斗浜町貝塚(夥多、文献42)出土。

10 イ ガ イ *Mytilus crassitesta* Lischke 本斗浜通 (文献41)、本斗南浜町 (文献42) の二貝塚より出土。或はエゾイガイか。

11 ホ タ テ ガ イ *Patinopecten yessoensis* (Jay) 東タライカ (文献48—五三三頁、文献52、文献56—三三三、三四頁)、西タライカ (文献48—一六八頁、文献56—三三三頁)、鈴谷 (北) (文献42—三八八頁、文献20—二七三頁、文献56—二四頁)、鈴谷 (南) (著者同定、東大人類学教室資料) の四貝塚から出土している。

12 ス ミ ノ エ ガ キ *Osrea* (*Crassostrea*) *rivularis* Gould 東タライカ貝塚出土 (夥多、文献48—五三三頁、五四七頁、文献56—三三三及三四頁。或はマカキの誤定か)。

13 マ ガ キ *O.* (*Crassostrea*) *gigas* Tunberg 東タライカ貝塚 (文献54)、鈴谷 (北) 貝塚 (文献20—二七三頁、文献56—二四頁、二七頁) 出土。マカキには普通ナガガキと俗称される長大なるものがある。

14 カ キ 類 *O. sp.* 西タライカ貝塚 (夥多、文献48—一六八頁、文献56—三三三頁)、鈴谷 (南) 貝塚 (夥多、文献4—一六四頁) 出土。多分前者と同じマカキである。

15 エゾイシカケガイ *Clinocardium californiense* (Deshayes) 本斗浜通貝塚出土 (文献41)。

16 ア サ リ *Venerupis* (*Amygdala*) *japonica* (Deshayes) 鈴谷 (北) 貝塚出土 (文献20—二七三頁、文献56—二四頁)、鈴谷 (南) 貝塚出土 (著者同定、東大人類学教室資料)。

17 バ カ ガ イ *Maetra sulcataria* (Reeve) 鈴谷 (北) 貝塚出土 (文献20—二七三頁、文献56—二四頁、二五頁、文献59—二五三頁)

18 ウ バ ガ イ *Maetra sachalinensis* Schrenck 東タライカ (文献48—五三三頁、文献56—三三三頁)、西タライカ (文献48—一六八頁、文献56—三三三頁)、鈴谷 (北) (文献42—三八八頁)、鈴谷 (南) (著者同定、東大人類学教室資料、文献1—四三五頁) の諸貝塚より出土。

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

19 オ、ノガイ Mya (Arenomya) japonica Jay 東タライカ (文獻48—五三三頁、文獻56—三三三頁)、鈴谷(北)

(文獻42—三八八頁)、本斗浜通 (文獻41)、本斗南浜町 (文獻42) の諸貝塚より出土。

以上のうちで、四箇処の貝塚から出土しているのはホタテガイ、ウバガイ、オ、ノガイ。三箇処の貝塚から出ているものはエゾタマキビ、エゾボラ。二箇処の貝塚から出ているものはイガイ、マガキ、カキ類、アサリ。一箇処の貝塚から出ているのはヤマタニシ、タマキビ、エゾタマガイ、ツメタガイ、タマツメタ、ヤナギノイト、ヒメエゾボラ、スミノエガキ、エゾイシカケガイ、バカガイである。一貝塚から夥しく出土した種類はエゾタマキビ、エゾボラ、マガキである。以上一つひとつ資料にあたつた訳でないで、多少疑わしいものを含んでいる。然し一般に貝の種類はすくないのは北地の特徴である。また巻貝が殊にすくないのは、貝塚附近に砂浜の多いためであらう。

ロ 獣 類 Mammalia

獣類の資料は東タライカ、西タライカ、胡蝶別、鈴谷(北)、鈴谷(南)、江ノ浦、遠節、本斗駆構内、本斗大通、本斗南浜町、吐鯨保、藻白、北古丹、南古丹への途中の諸貝塚から報じられている。

目 録

- 1 クジラ、2 トド、3 イルカ、4 オットセイ、5 アザラシ、6 海獣、7 クマ、8 アカグマ、9 イノシシ、10 カラフトブタ、11 シカ、12 ジャコウシカ、13 トナカイ、14 シベリヤトナカイ、15 ウマ、16 キツネ、17 アカオ、カミ、18 シベリヤオ、カミ、19 イヌ、20 カラフトイヌ、21 シベリヤイヌ、22 シチロウネズミ、23 種不明雜骨等である。

記 載

- 1 クジラ Cetacea 東タライカ (文獻48、加工品あり)、鈴谷(北) (文獻20—二二三頁、文獻56—二四頁)、鈴谷(南) (文獻2—三四乃至三五頁)、本斗南浜町 (文獻21—二五〇乃至二五九頁、文獻36—一四二頁、加工品もあり、文獻42—三八八頁等、

文獻56——一九乃至三三頁、加工品もあり、吐鯤保（文獻54）の諸貝塚から出土している。吐鯤保には一体分が埋まつていたと言ふことである。種は不明であるが、オホツク土器を出す貝塚には鯨骨製品が非常に多い。

2 ト ド *Eumetopias jubata* (Schreiber) 北古丹貝塚（文獻18——五一頁）からは多数出土、南古丹への途中貝塚（文獻18——五一頁）からも出土してゐる。

3 イルカ *Delphinus* 鈴谷（南）貝塚出土（文獻4——一六三乃至一六五頁）。

4 オットセイ *Callotaria ursina* Linne 鈴谷（南）貝塚出土（文獻4——一六三乃至一六五頁）。

5 アザラシ *Phocaea* 本斗南浜町貝塚（文獻42——三八八頁等）及北古丹貝塚（文獻18——五一頁）から出土している。後者には特に多く認められた。

6 種不明の海獣 西タライカ貝塚（文獻48——一六八頁、文獻56——三三三頁）、胡蝶別貝塚（文獻38、加工品もあり）、鈴谷（北）貝塚（文獻56——二四頁、二五頁）及鈴谷（南）貝塚（文獻19——三〇五頁）の四貝塚から出土している。

7 ク マ *Ursus* 鈴谷（北）貝塚（文獻20——二二三頁、文獻56——二四頁）、鈴谷（南）貝塚（文獻4——一六三乃至一六五頁）、本斗南浜町貝塚（文獻36——一四二頁、文獻42——三八八頁等、文獻51——六八八頁等）から出土している。北海道の貝塚に於けるが如く夥しくない。

8 アカグマ *Ursus arctos beringianus* Middendorf 東タライカ貝塚出土（文獻63——二二二頁）。

9 イノシシ *Sus* 東タライカ貝塚（文獻52——八四二頁、文獻56——三四頁）、鈴谷（南）貝塚（文獻4——一六三乃至一六五頁）^{と少し}遠節貝塚（文獻7——五一五頁、牙加工品あり、文獻43）、本斗南浜町貝塚（文獻42——三八八頁等）、藻白貝塚（文獻42——三八八頁）等の五貝塚から出てゐる。これは恐らく内地の *Sus leucomystax* ではなく、大陸系の *S. scrofa* かも知れぬが、直良信夫の主張するカラフトブタの問題と関連して注目を要する。

10 カラフトブタ *Sus inoi* Naora 東タライカ貝塚（文獻45——二九二頁挿図、文獻50——一六〇頁、六一〇乃至六一六頁、

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

六二〇頁、文獻56—三四頁、文獻60—二四二乃至三四三頁)、本斗駅構内貝塚(文獻45—二九二頁挿圖)、本斗南浜貝塚(文獻同上)に資料がある。本斗駅構内貝塚から稻生典太郎が採集した資料によつて直良が新らしく査定したものである。普通のイノシ、より鼻骨が短く、広いと言う。然しなお完全に家畜化されたものでなく、多分に野性的なものであることは疑いない。

11 シ カ Cervus 東タライカ貝塚(文獻48—五三三頁、加工品もある)、鈴谷(北)貝塚(文獻20—二三三頁、鹿角。

文獻56—二四頁)、鈴谷(南)貝塚(文獻4—一六三乃至一六五頁、文獻55—五二七乃至五二八頁)、本斗南浜町貝塚(文獻21—二五〇乃至二五九頁)の諸貝塚に資料がある。これも内地の Cervus sika と同一種か否か、稍疑問である。

12 ジャコウジカ Moschus moschiferus Linne 本斗南浜町貝塚(文獻42—三八八頁等、文獻56—一四二頁、文獻56—一九乃至三三三頁)に報告がある。

13 トナカイ Rangiferus tarandus phylarchus Holster 東タライカ貝塚(文獻50—六二〇頁、文獻52—八四三頁)と本斗南浜町貝塚(文獻36—一四二頁、文獻42—三八八頁等、文獻56—一九乃至三三三頁)とから出土している。これとシベリヤトナカイは又別であろう。

14 シベリヤトナカイ R. tarandus siberianus Holster 東タライカ貝塚(文獻50—二二七頁、二二八頁、文獻56—三四頁)に資料がある。

15 ウ マ Equus caballus 本斗南浜町貝塚出土(文獻21—二五〇乃至二五九頁)。

16 キツネ Vulpes 東タライカ貝塚(文獻65—一三五乃至一三六頁、犬齒加工品)、本斗南浜町貝塚(文獻36—一四二頁、文獻56—一九乃至三三三頁)。

17 アカオ、カシ Cuon alpinus (Pallas) 東タライカ貝塚(文獻63—二三六頁第一六圖、二三六乃至二三八頁)及鈴谷(北)貝塚出土(文獻34—一二頁)。

18 シベリヤオ、カン *Canis phodophilax siberianus Temminck* 鈴谷(北) 貝塚出土(文獻42—三八八頁、文獻51—六八八、六九一頁、文獻56—二七頁)。

19 イヌ *Canis* 東タライカ貝塚(文獻46—七四乃至七五頁、文獻50—六二〇頁、文獻51—六八四、六八八、六九一、六九二、六九五頁註、文獻52—八四二頁、文獻56—三四頁)、鈴谷(北) 貝塚(文獻20—二三三、二五六頁、文獻56—二四、二七、一〇七乃至一〇九頁)、遠節貝塚(文獻51—六八八頁)、及本斗南浜通貝塚(文獻21—二五〇乃至二五九頁、文獻42—三八八頁等、文獻51—六八八頁)出土。

20 カラフトイヌ *C. familiaris karafutus* 東タライカ貝塚出土(文獻56—三四頁、文獻63—三五一頁)、橿を築くイヌであらう。

21 シベリヤイヌ 東タライカ及鈴谷(北) 貝塚出土(文獻52^a及文獻56—一〇七乃至一〇九、カラフトイヌと言うのはこれとアイヌのイヌが混血せるものか。

22 シチロウネズミ *Rattus norvegicus (Expleven)* 東タライカ貝塚出土(文獻63—一七乃至一八頁)。

23 種不明雜骨 西タライカ貝塚(文獻48—五四一頁、加工品である)、胡蝶別貝塚(文獻38—二七乃至三三六頁)、江ノ浦貝塚(文獻35—一〇四頁、加工品である)、本斗大通貝塚(文獻22—二五四頁、加工品)、吐鯤保貝塚(文獻22—二五四頁、加工品)、藻白貝塚(文獻22—二五四頁、文獻23—四七一頁、文獻25—五一四頁、文獻30—一九一頁、文獻32—一六二頁)、北古丹貝塚(文獻30—九五頁、文獻53—二六八頁、以上いずれも加工品)の諸処より出土。

以上獣類の種の数は、貝類のものを凌駕する以上に多数出土している。殊に海獣が多い。然しジャコウジカ、シベリヤトナカイ、アカオ、カミ、シベリヤオ、カミ、シベリヤイヌと言つた、大陸系の獣類が数多く認められている。これ等は大陸と樺太が陸続きの頃に渡つて来たものの遺残とも見られるが、大体高緯度地帯で、間宮海峡が冬季長く結氷するから、自由に往復出来る為とも考えられる。ただこのフアウナは日本本土のものとは相当著しい差のある点に注目し

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

なければならぬ。これ等の中には海獣、クマ、シカの類、キツネの如く、狩獵対象と考えるものもあり、トナカイの類、カラフトイヌの如く、糧用の畜獣と見られるものもある。ただそれ等が属する時代的変遷はオホツク式の貝塚のみが殊によく調べられている状態で、不可能である。殊にカラフトブタ等は問題である。クマ、アカオ、カミ、シベリヤオ、カミは、言わば猛獣である。カラフトアイヌにクマ祭の風習なく、クマの出土例がすくない。いずれにしても、各時代の人びとの生活に、これ等の獣類が、相当深い関係を持つてゐることは明らかである。その点貝塚の貝類よりも、これ等獣類の方が、遙に重大な生活資料であつたことが考えられる（殊にオホツク土器人についてそうであつた）。

ハ 鳥 類 Aves

鳥類の資料は東タライカ、鈴谷（北）、鈴谷（南）、本斗浜町の諸貝塚から出ている。

目 録

1 ワシ、 2 水禽類、 3 種不明雑骨。

記 載

1 ワ シ Aquila 鈴谷（南）貝塚から、クジラとりや、幾何学文様を、ワシの脛骨と思われるものに刻んだ骨入れが出ている。これは最初坪井正五郎博士が採集したものであるが、類品が国立東京博物館資料中にもある。坪井博士採集のものは東大人類学教室に現存しており、それに関する文献には、以下の如きものがある。

文献2—三四乃至三五頁、文献7—五一五頁、文献12—三六頁、文献15—三六五乃至三六六頁、文献16—一八六頁、文献26—二二二頁、文献28—二五一頁、文献30—二〇三頁、文献57—六五五頁、文献61—二二九頁、文献64—二五六頁。これらの類品が、又、本斗南浜町貝塚からも出土している（文献36—二五〇乃至二五九頁、文献56—一九乃至三三頁、文献64—二五六頁）。

2 水 禽 類

本斗南浜貝塚出土（文献36—二五〇乃至二五九頁、文献56—一九乃至三三頁）。

3 種不明雜骨 是東タライカ貝塚(文獻48—五三三頁、加工品もある)、鈴谷(北)貝塚(文獻56—二四頁、加工品、

本斗浜町貝塚(文獻36—二五〇乃至三五九頁、文獻56—一九乃至三三頁)から出土している。

鳥骨もすくなくからぬようであるが、余り同定されておらず、なお考究の余地がある。

二 魚 類 Pisces

東タライカ貝塚、鈴谷(北)貝塚、鈴谷(南)貝塚、本斗浜通貝塚、本斗南浜町貝塚から出土している。

目 録

1 タラ、2 カレイ、3 サメ、4 ニシン、5 サケ、6 マス、7 種不明雜骨

記 載

1 タ ラ *Gadus macrocephalus Tilesius* 東タライカ貝塚出土(文獻61—一五六頁)。

2 カレイ *Clidoderma* 谷(北)貝塚(文獻42—三八八頁)、及本斗南浜町貝塚(文獻36—一四二頁、文獻42—三八

八頁、文獻56—一九乃至三三頁)の両者から出土している。カレイは殊に北の海に豊富な底棲魚類で、重要な保存食料であつたと思われる。

3 サ メ *Chimaera* 本斗南浜町貝塚出土(文獻36—一四三頁、文獻42—三八八頁、文獻56—一九乃至三三頁)。

4 ニ シ ン *Clupea pallasi Cuvier et Valenciennes* 本斗南浜町貝塚出土(文獻36—一四二頁、文獻42—三八八頁、

文獻56—一九乃至三三頁)。

5 サ ケ *Onchorhynchus haberi Hilgendorf* 鈴谷(北)貝塚(文獻42—三八八頁)及本斗南浜町貝塚(文獻

36—一四二頁、文獻42—三八八頁、文獻56—一九乃至三三頁)の両方より出土。

6 マ ス *Onchorhynchus persi Hilgendorf* 鈴谷(北)貝塚出土(文獻42—三八八頁)。

7 種不明雜骨 鈴谷(北)(文獻56—二四頁)及本斗浜通(文獻41、文獻56—八八乃至八九頁)の二貝塚から出土して

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

いる。

魚骨も、魚の種類もなお多く検出し得るものと考えられる。現在まで、上述の各種のものは豊富に漁獲され、その為に越冬生活が大いに楽であることは、一般に知られている事実である。

木 ウニ類 Echinoidea

遠節、本斗浜通、本斗南浜町の諸貝塚に資料がある。

目 録

1 ウニ類

記 載

1 ウニ類 Echinoidea 遠節(文獻54)、本斗浜通(文獻54)、及本斗南浜町(文獻36—142頁、文獻42—388頁、文獻56—19乃至33頁)の諸貝塚から出ている。種は不明であるが、エゾバフンウニの如きものであらう。

へ その他

その他鈴谷(北)貝塚、本斗浜通貝塚等に下記の如き資料が見られる。

1 灰、2 炭(木炭)、3 石炭

灰及炭(木炭)は鈴谷(北)(文獻20—223頁、文獻56—23頁)及本斗浜通(文獻41、文獻56—88乃至89頁)の二貝塚に貝層中に混じて発見され、又鈴谷(北)貝塚からは石炭の玉(後述)や、石炭の露頭(文獻56—25頁)も附近に見られるが、これを燃料とした痕跡はないと言う(文獻20—257頁、文獻56—24頁)。

b 人工遺物

人工遺物には、イ土器、ロ石器、ハ骨角器、ニ金属器がある。以下各項について略述する。

イ 土 器

上述諸遺跡中土器の不明なものは北本斗と、本斗大通の二貝塚のみで、他の貝塚からは、皆土器或は、それに相当するものが採集されている。採集されていて記載はないが、推定されるものも一、二を含んでいる。これ等の資料を分類羅列して見ると、次の如くである。

1 樺太式縄目文土器、2 後北式系土器、3 祝部式土器、4 オホツク式土器、5 内耳土器、6 陶器、7 櫛目文土器、8 宗仁式土器

1 樺太式縄目文土器 遠節貝塚、本斗南浜町貝塚、遠節良音間神社貝塚の三箇処から出土している。殊に本斗南浜町貝塚ではC、D、Eの各下層から出土している(文獻36)。前北式系統の縄文を主文とした鉢形土器で、壺形のものもある。この最も古い土器に樺太独特の特徴が見られる意味は重視せねばならぬ。

2 後北式系土器 遠節貝塚(文獻43)及鈴谷(北)貝塚出土。薄手の鉢形土器で、細かい縄文に平行沈線束文や、少量、突点文、突瘤文がある。鈴谷(北)貝塚のものは、果してこの遺跡から出土したか否か、馬場脩はむしろ否定的態度をとっているが、それ程疑う必要もなからう。但し次のものと同様北海道方面からの輸入品であらう(文獻56)。

3 祝部式土器 これも遠節貝塚から出ている(文獻43)。内地から勿論流転したものであらう。僅かな資料であるが、内地の土器編年との関係に於て、樺太のものを推定するのに大切である。

4 オホツク式土器 大部分の貝塚の土器がこれである。即ち、東タライカ(文獻56)、西タライカ(文獻48)、柴浜(文獻54)、鈴谷(北)(文獻40、60)、鈴谷(南)(文獻20)、江ノ浦(文獻35)、本斗沢構内(文獻45、多分オホツク式)、本斗南浜町(文獻36、文獻56)、遠節良音間神社(文獻56)、遠節2番地(文獻56)、本斗小学校々庭(文獻56)、吐鯉保(文獻54)、内幌(文獻56)、藻白(文獻22、23、25、30、32)、北古丹貝塚(オホツク式か)の一五貝塚から出土しており、全体の過半数を占めている。大体鉢形土器で、浅いものも、稍深いものもある。尖底もあり、糸底のあるものもある。文様の種類によつて縄目文土器、刻文土器、型押文土器等と言う別名で呼ばれもした。樺太のオホツク式土器と、北海道のものに

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

は著しい差がある。それは一方では年代の相異とも見られ、他方では文化圏のずれとも考えられる。後北式系土器、縄目文土器、刻文土器は、前北式から引き続き突瘤があるので古く、型押文土器は、それがないので新しいと言う考えもある(文獻51a)。ソーマン文は樺太のオホツク式にはないので、これは文化圏の相異と言われる。又北海道でこれが擦文土器と同時に存在するので、樺太のオホツク式も同様、その時代のものとされている。^{註1}

註1 馬場脩は前北式の時代を樺太の前期、オホツク式時代をその中期、次に述べる内耳土器の時代をその後期としているが、この区分は不都合である。

5 内耳土器 東タライカ(但し主として堅穴)(文獻56)、栄浜(文獻同上)、胡蝶別(文獻同上)、鈴谷(北)(文獻同上)、鈴谷(北) 貝塚附近(文獻38)、鈴谷(南)(文獻20、56)、江ノ浦(文獻56)、遠節(文獻同上)、本斗浜通(文獻同上)、本斗南浜町(文獻同上)、吐鯉保(文獻同上)等から、堅穴に伴う小貝塚、同じ貝塚でもオホツク式とは層位を異にし、或は多少地点をずらして発見される。古くはオホツク式土器の時代に始まり、最近迄用いられた。^{註1} 大体、本稿では金属器時代を表わす土器とする。内耳土器自体に土製の外、鉄製のものもあつて、マキリ、刀子等の鉄製品を伴出し、完全にこの時代が金属器時代であることを表示しているからである。

註1 内耳土器の分類等に関しては文獻47、51、56等の外、新岡武彦「樺太の内耳土器」人誌五二―三、六七―七八頁、昭二・三参照。

6 陶器 鈴谷(北)(文獻20、56)及遠節(文獻44)の二貝塚から出ている。陶器と言っても、内耳土器と伴出するもので、純粹に陶器のみを出す貝塚のものではない。内耳土器と共に、むしろ堅穴の遺品である。以上は編年の稍確実な資料であるが、以下のものは、その位置が殆んど全く不明のものである。

7 櫛目文土器 東タライカ貝塚、鈴谷(北) 貝塚出土及栄浜(或は包含地?)出土。馬場脩はオホツク式の一類と考えているようであるが(文獻56―六三乃至六四頁二七図)或は遙かに古いとも思える。朝鮮のものとも類似点があり、その大陸との関連に興味が持たれる。

8 宗仁式土器 宗仁貝塚出土。馬場脩はこれの類例を赤峰紅山後遺跡に見めている（文獻56—二三頁）。河野広道博士の教示によれば、北海道にも一例あると言う。編年上の位置は今のところ全く不明である。上述の記録に因つて各貝塚の古さを表示すると左の如くである。

第一表 樺太の貝塚出土土器資料編年表

番号	遺跡名	5 内耳土器	4 オホツク式			3 祝部式土器	2 後北式系土器	1 樺太式縄文土器
			押型文	刻文	縄目文			
1	東タライカ	—	—	—	—	—	—	—
2	西タライカ	—	—	—	—	—	—	—
3	栄浜	—	—	—	—	—	—	—
4	胡蝶別	—	—	—	—	—	—	—
5	鈴谷（北）	—	—	—	—	—	—	—
6	鈴谷（北）附近	—	—	—	—	—	—	—
7	鈴谷（南）	—	—	—	—	—	—	—
8	江ノ浦	—	—	—	—	—	—	—
9	遠節	—	—	—	—	—	—	—
11	本斗駅構内	—	—	—	—	—	—	—
12	本斗大通	—	—	—	—	—	—	—

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

1

— 74 —

1 石斧には、磨製石斧と、半磨製半打製石斧と、打製石斧とがある。一般の石斧を稻生典太郎は8類外一類に區別している。これは柴浜貝塚の資料によつたものである(文獻56―四二乃至四六頁、文獻58)。もつともこれ以外にただ石斧とのみ記した報告もある。磨製石斧は鈴谷(北)貝塚(文獻20、文獻56―二五、二七頁)と、本斗南浜町貝塚(文獻36―一四二頁、文獻56―一九乃至三三頁)とから出ている。後者ではそのE層から互に重なつて発見されたと言ひ、鈴谷(北)貝塚の石器の数は二〇〇点にも達すると言ふ。半磨製石斧は東タライカ貝塚(文獻48―第廿四圖一乃至二一)から出ており、安山岩製と言ふ。鈴谷(北)貝塚(文獻20、文獻56―二五、二七頁)からも少量出ている。打製石斧は鈴谷(北)貝塚(文獻20、文獻56―二五、二七頁)から、短冊形のものが多出した。単に石斧と言ふ記載は北本斗(文獻22―二五四頁)、本斗大通(文獻同上)、吐鯤保(文獻同上)、北内幌(文獻同上)、内幌(文獻同上)の五貝塚に見られる。

2 石鏃は 東タライカ貝塚から有柄のものが出土しており(文獻56―三六頁)、安山岩(或は無斑性安山岩)製たと言ふ(文獻48―二四圖五)、一六一頁、文獻56―三三五頁)。柴浜には精巧なるものが三〇〇〇個も認められた(文獻54、文獻58)。鈴谷(北)貝塚にも数百点あり(文獻20、文獻56―二五頁、二七頁、三六頁、一一一―一二三頁)、本斗大通貝塚(文獻22―二五四頁)、本斗南浜町貝塚(文獻56―一四二頁、文獻54)にも五〇〇個程あつた。最後のものは薄形蛇文岩製で、B層から七個、E層から一〇箇出たと言ふ。吐鯤保貝塚(文獻22―二五四頁)、北内幌貝塚(文獻同上)、内幌貝塚(文獻同上)からも出ており、藻白貝塚では燕形銛頭と関連して出ている(文獻22―二五四頁、文獻23―四七五頁、文獻25―五一四頁、文獻30―一九二頁、文獻32―一七三頁)。石鏃に磨製品の多いことについて、馬場脩はその大陸との関連を論じている(文獻56―一一一―一二二頁)。

3 石槍は 柴浜貝塚(文獻56―四八頁)、鈴谷(北)貝塚(文獻20、文獻56―二五頁、二七頁)にある。

4 石じは 柴浜貝塚に石ナイフ(文獻56―四六頁)があり、本斗南浜町貝塚E層(文獻20、文獻56―三〇〇頁)にもあり凝灰岩製と言われている。

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

5 石庖丁は 打製石庖丁と称せられるもので鈴谷(北) 貝塚(文獻20、文獻56―二八頁)に於て、人骨の側に置かれたオホツク式土器の口にあつた。単に石庖丁形をしていると言うに過ぎなからう。

6 砥石は その一つは鈴谷(北) 貝塚(文獻20、文獻56―二五頁) から今一つは本斗浜通貝塚(文獻56―八八乃至八九頁)から出土している。後者は粗板岩製の $540 \times 2 \times 8$ 耗のもので、手砥だと言う。

7 石製裝飾品 には種々あるが、柴浜貝塚の石製裝飾品は管玉と小玉で(文獻54、文獻56―四八頁、文獻58)、鈴谷(北) 貝塚からは、表面を磨き、細長くした石灰製の有孔飾玉が、人骨に附随して発見された(文獻20、文獻56―二八頁)。石灰の小玉は柴浜貝塚にもある(文獻56―四八頁)。本斗南浜町貝塚からは大形の琥珀玉、硝子、瑛瑯、珊瑚製品が、オホツク式の金属器と共に発見された(文獻54、文獻56―九七頁)。硝子玉は鈴谷(北) 貝塚(文獻56―二六頁)、吐鯤保貝塚(文獻47―一〇三頁、大小二個)、及北内幌貝塚(文獻22―二五四頁)の三貝塚から純然たる金属文化遺品としても出土している。

8 石器 江ノ浦貝塚(文獻35―一〇四頁)と遠節貝塚(文獻22―二五四頁)には、唯一般に石器が出たと記るされてある以上のうち、蛇文岩製の石鏃が、樺太式縄文土器に伴出したらしく、殆んどすべてはオホツク式土器の伴出物と見られ、それも玉類の大部分は、オホツク式後半の金属器文化伴出物と見てよからう。

ハ 骨角器

骨角器は東タライカ、鈴谷(北)、鈴谷(南)、江ノ浦、遠節、本斗大通、本斗浜通、本斗南浜町、吐鯤保、藻臼、北丹古の諸貝塚にある。

その種類は

- 1 骨鉋、2 骨鏃、3 骨槍、4 烏骨製刺具、5 骨錐、6 釣針、7 骨柄、8 骨製楔、9 鹿角製品、
- 10 牙器類、11 鯨骨製品、12 烏骨製針入、13 骨針異形骨器、15 一般骨器 である。

1 骨鉾は、東タライカ貝塚（文獻56―三三―三六頁、四九―五二頁）にあるもので、鏃引と廻転式の二種があり、異形式のものが鈴谷（北）貝塚にもあり（文獻56―二五頁）、本斗浜通（文獻41、文獻56―八八乃至八九頁）、本斗南浜町（文獻36―一四二頁、文獻56―三二頁）、藻白（文獻22―二五―四頁、文獻23―四七―一頁、文獻52―五一―四頁、文獻30―一九二頁、文獻32―一六二頁）及北古丹（文獻18―五一―一頁、文獻18a―九五頁、文獻53―二六二頁）の諸貝塚には、いずれも燕尾形鏃頭がある。松本彦七郎博士は、海馬島に於て、これ等をアザラシ猟に用いたとしている。

註1 石鏃を附加する骨鏃である。

2 骨鏃は、東タライカ貝塚（文獻56―三三―五頁）に於ては、三角或は四角稜で、銅鏃を差し込む装置があり、留孔もあると言ひ、全部で一〇〇点位出土している。本斗南浜町貝塚のもの（文獻36―一四二頁、文獻56―三〇頁、五四頁）も角鏃である。本斗南浜通貝塚にはチロシにつける骨鏃もある（文獻56―一〇一頁、一〇三頁第四八圖2）。

3 骨槍は、本斗南浜町貝塚（文獻36―一四二頁、文獻56―一九乃至三三頁）から出ており、南浜町のもは長さ一・九厘に及ぶ三角稜のものである。

4 鳥管製刺具は、本斗南浜町貝塚（文獻56―五一―一頁第一七圖1、2、五三頁）にある。この類品は内地の縄文後、晩期にも求められる。

5 骨錐と報告されているのは西タライカ貝塚出土のものである（文獻48―五四―一頁、文獻56―三七頁）。

6 鈎針は、東タライカ貝塚（文獻56―三六、五三頁第一八圖）に例があり、トナカイの角製と言われ、鏃と針とが一緒になつている。

7 骨柄、東タライカ貝塚出土のものはY字型をした尾部のあるもので、一種の鹿角刀装具とも考えられ（文獻56―三五頁、五五頁）、別に線刻した骨匕とも、骨鞘とも思われるものがある。角製で、骨幣とすこし種類は異なるがこゝに入れておこう（文獻56―五一―一頁第一七圖14、五五頁）。以上のほかに筥のごときものもあり、鏃柄も加えることとすると、

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

本斗南浜町貝塚出土のものには骨筈であり（文獻36―一四二頁、文獻56―一八八頁）、又一つは、金属時代のもので小刀の柄らしい。本斗浜通貝塚には金属器時代のものとしてアイヌの鏃柄チロシがある。（チロシの先につける骨鏃も出ているから確実である）（文獻56―一〇二頁、一〇二頁第四八図一）。

8 骨製くさくさ俵はたけは 鈴谷（北）貝塚（文獻56―二五頁）と、鈴谷（南）貝塚（文獻3―一〇四頁）とにある。

9 鹿角製品としては 東タライカ貝塚の鹿角製マキリの柄、鹿角製刺具（鹿角の一方を削ぎしもの）これ等の未完成品を挙げることが出来る。その数量は甚だ多かつたと言う（文獻56―一三六頁）。

10 牙製品 東タライカ貝塚には、キツネの犬歯に穿孔したものがあり（文獻56―一三六頁、五五頁第二〇図）、遠節貝塚からはイノシシの牙に穿孔したものが四〇個も出土した（文獻22―二五四頁、文獻25―一五五頁）。本斗浜通貝塚からは金属器時代に属する象牙製環（文獻41、文獻56―一〇二頁、一〇二頁第四八図3）、長さ40耗、厚さ9耗のものが出土しており、本斗南浜町貝塚からも身体裝飾品らしい牙製品（動物の種類不明）が出ており、猪牙製飾玉もある（文獻63―一四二頁、文獻56―一五六頁、一〇二頁、一〇二頁第四八図5、長径3耗）。

11 鯨骨製品としては 東タライカ貝塚に穿孔した懷中時計大の小板と骨筈があり、又金属器時代の櫓の部分品、鯨骨製環、マキリの鞘もあり（文獻56―一三六頁、八七―一八八頁、一〇二頁、一〇二頁第四八図4）、鈴谷（北）貝塚にも骨刀と有孔小板、四角に切つた小板が見られ（文獻56―二五頁）、その他骨器の多くは鯨骨製品で第一貝層下部、第一赤土層、第一黒土層にありと言ひ（馬場例）外に、鈴谷（南）貝塚には骨刀をも含む各種のものがあり（文獻1―四三四乃至四三六頁、文獻3―一〇四頁、文獻56―一三頁）、本斗浜通貝塚のものには未完成品をも含み（文獻56―一八八頁）、本斗南浜町貝塚には長さ163耗、巾100耗、中央に四個の両挟り穴ある骨鋏と、高さ77耗、巾175耗、厚さ5耗の婦人裸像で、体の中央と、両肩に孔のあるものが出てゐる（文獻36―一四二頁、文獻56―二九頁、三〇乃至三二頁）。

12 鳥骨製針入れ 有名なもので、ワシの脛骨を切断したものをうけ、クジラ漁の絵や、幾何学的な文様を刻線で

描いている。その最も古い標品は、鈴谷（南）貝塚で、坪井正五郎博士が採集したものであるが、その由来は不明だが同様な類品が、東京博物館の資料にもある（文獻2―三四乃至三五頁、文獻7―五一頁、文獻10―二六四乃至二六五頁、二〇四乃至二二頁、四七四乃至四七五頁、文獻12―三六頁、文獻15―三六五乃至三六六頁、文獻16―一八五頁、文獻26―一二三頁（博物館資料）、文獻28―二五二頁、文獻30―二〇三頁、文獻57―六五五頁、文獻61―二二九頁、文獻64―二五六頁）。その他本斗南浜町貝塚でも類品が採集されている。これも材料は同じである（文獻36―一四三頁、文獻56―三〇頁、文獻64―一五六頁）。

13 鳥骨製小針 上述の針入に入れるもの（文獻56―二七頁、五四頁、鈴谷（北）貝塚出土。東タライカ出土のメドのある針もある（文獻56―三六頁、五一頁第一七圖19―21、五五頁）。

14 異形骨器 としたのは、本斗南浜町貝塚出土の糸巻形の有孔板で、長さ4粒、巾中央部12粒、幾何学文様を刻んであるものと、長さ31粒、中央巾20粒、弧形の線文を有するもの（文獻54―三二頁）。

15 その他 一般に骨角器と報じられているものが胡蝶別貝塚（文獻38―二二七頁、海獸骨加工品を含む）、吐鯨保貝塚（文獻22―二五四頁）にある。

二 金属器

東タライカ貝塚からは骨鏃に銅板をはさむ装置のあるものが見られ（文獻56―三五乃至三六頁、内耳土器に関するものとして（主として堅穴に附属する小貝塚）鉄刀子、鉄鍋、櫛の金具が出ている（文獻56―八七乃至八八頁）。本斗南浜町貝塚からは上記象牙の不整環に附した金属のカスガイが出ており（文獻41、文獻56―八八乃至八九頁）、吐鯨保貝塚からは日本刀とその附属品が出ている（文獻22―二五四頁）。その他、煙管の雁首（シマキセリは石製品である）、マキリの刃、日本の貨幣等、これ等は東タライカ貝塚附近の堅穴から発見され、直接貝塚の出土品ではない。

日本人、その他の外人が住みついたのは極めて最近のことである。これ等はいずれも古アジア人種の仲間で、それ等の勢力の消長、居住区等に関しては、容易に速断を許さぬものがある。たゞ鳥居龍藏博士が調査しはじめた明治中葉以後、この樺太、千島、北海道に亘つて最も多く住んでいたのはアイヌであり、その風習等の相異から、それを千島、樺太、北海道の三系統にした。河野広道博士はアイヌの墓標等から樺太アイヌを東、西エンチウと言う第一群に、最も日本に接近したものをサルウンクルと称する第三群に分ち、その間のものを第二群の諸族とした。いずれにしても、それと古代アイヌ諸種族、或は上述の他のギリヤーク、オロッコ等と、これが如何なる関係にあるか全く不明と言わざるを得ない。

註一 和田清「唐代の東北アジア証国」東方学第八輯、昭二九・六。

唯、最近ブレ・縄文と仮称せられる土器のない石器の一群が、北海道の各地で発見され、既に北海道最北端の稚内地方にも存すると言うことから、この類が、樺太にもないとは断じ難い。それも果して土器以前の石器と一概に決論してよいか不明だが、それが認められれば樺太島に於ける人類の最も古い証拠になる。大陸からの通路として、間宮海峡が氷結する事実と併せ考えると、こうした石器文化の源流を、各種の大陸系動物も存すること故、その方面に求め度いのは、この種の研究者の切々たる希求であるであらう。然しその夢も現実となるか否か、今は全く不明である。

一体、人にしても文化にしても樺太には二つの場合がある。一つは西方の大陸から来るもので、南下するルートと考えてもよからう。今一つは日本列島方面から行く、北上する経路である。ところで総ての生物は経度に沿うて横切りするのが大原則であるから、樺太のフロラ、ファウナ、人類、そして文化も、先ず最初は前者のルートに沿うて入つたものと見るべく、後の経路が新らしいのは当然である。それは大陸と日本列島が接続していた洪積期を考えても同様である。

上に述べた所謂ブレ・縄文石器に続くものは、若しかすると例の鈴谷（北）貝塚等から少量出土した櫛目文土器であ

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

る。このものはオホツク土器の一類として出土しており、それが朝鮮のものとどれ程類似しているかは疑問であるが、カムチツカの遺跡には全く同じ文様のものがある。こうした点から推考して簡単に扱い得ない資料のように思える。それにしても、そうした文化を齎したものが、紀元前後に既にその方面に在住したとされるアイヌの祖先である等とは勿論考えるのではない。ただ、こうした一連の樺太の最古の資料が、悉く西漸（或は南下）資料であつて、北上資料に乏しいと言うことに注目したいのである。

日本が樺太を領有している間に発見出来なかつた、如何に古い文化が今後発見されるとしても、恐らくこの原則は破れないと思う。そしてこれよりも遅くして日本の文化——即ち北上文化の影響が現われて来ている。（このことは日本の最古の文化が、南下する文化の流れに関連があると言う可能性を残している点に於て、日本の縄文々化の起源について更に重要である）。

北上文化の最古のものは所謂樺太式縄目文土器であり、夫は土器そのものから北海道の前北式と因縁深きものと思われる。然し前北式そのものではなく、それが樺太的に変貌されている点を注目せねばならぬ。既にそこに特種な文化があつて、それがこの変貌の原因となつたと考えるのが当然であらう。全部が全部、移入された土器ではなく、その地で製作され、使用されたものを含むと見なければならぬ。樺太式と言う含みは、そうしたものと解釈される。ところで前北式すら一応日本本州の晩期縄文土器文化とは別種のものとしてされているのであるから、樺太のものは更に縁遠いものとせざるを得ない。この土器の時代になると、遺跡の特徴も稍明かになる。即ちその貝塚は遠節と本斗南浜町の下層（C、D、E層）の二つで、前者は短い谷に臨む砂丘らしく、後者は平坦な砂地にある貝塚で、谷の關係は不明である。この文化に伴う遺物の特殊なものとしては、後者のE層から出た、磨製石斧、薄形蛇文岩製の石鏃、凝灰岩製の石匕等がある。然し一般に、この文化には大量の海獣骨、その他の獣骨も伴わず、石器、骨角器の出土量もすくないらしい。この種の土器が、貝塚以外から出る例を加えて見ても、余り北へは分布していないことも特徴である。

遠節で出た祝部土器は、如何なるものか不明であり、その出土状態も未聞であるが、後北式に伴つたものであろうか。そうとすればいさゝか時代のずれが感じられる。何となれば祝部は土師に伴う筈であり、それなれば次のオホツク式と混出した方が理解し易い。

その次にオホツク式が来る。これは又北上文化ではない。かと言つて南下文化でもない。^{註1}専らオホツク海を取り巻いて、そこに分布する特殊文化である。アリニューシヤン群島、カムチャツカ半島の一部、千島列島、黒龍江河口から、樺太の各海岸、北海道の北東部に亘つている（北海道から見れば、明かに南下文化である）。そしてその北海道に於ては、例の擦文土器と南北に境を接している。そしてそれは大体日本の土師と平行関係にあるとも言われている。その文化のすくなくとも一部は、それと考えられるのである。そうなれば擦文土器が、河野博士のサルウンクルに結び付ける可能性も生じ、他の地域では又それぞれアイヌの例の第Ⅰ群、第Ⅱ群とも関係付けて考えられて来る。^{註2}それはとに角として、北海道のオホツク式は所謂ソーメン文が長く盛行するのに対し、樺太では縄目文土器を最初の段階として、最初の樺太式縄文土器以来、引き続き突瘤文のある刻文土器と、その無い刻文土器との一段階がはずき、型押文土器が盛行する段階で、北海道のオホツク式と差が無くなるようである。

註1 前述の如くオホツク式櫛文土器を認めれば、この土器の起源は案外古いのかも知れない。南下したのが新しいと言ふのかも知れない。馬場脩が挙げている後述する土器の突瘤の問題、磨製石鏃の問題、鏃の形式類似の問題等、オホツク文化に多くの大陸系遺残のあることは明かで、突きとめれば日本の縄文文化と同じ古い伝統をもっているのかも知れない。宗仁式土器も同氏によれば同じく大陸系の古い文化に編入されているが、焼成も良好すぎるし、なお甚だ疑問である。

註2 四四頁参照。

鈴谷（北）貝塚からは磨製石斧が二〇〇個も出土し、同貝塚には短冊形の打製石斧も夥しく、栄浜には精巧な石鏃が三〇〇〇個も認められた。これ等がどの段階のオホツク式に伴うか確たる記録はない。単にこうした数量からのみでなく、石器の種類から見てもオホツク式文化が、石器時代のものであることは確実である。その途中から金属文化へ移行

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

したのである。問題は樺太のオホツク式の、どの段階から金属器が普及するかと言うことである。東タライカ例と、本斗南浜町例等を考慮して検討してみると、その骨角器の形態等も併せ考えて、先ず刻文土器の突瘤を伴わぬものの辺からでないかと思われる。この金属器はどこから来たのであろうか。擦文土器には蕨手の太刀等が伴っている事実から類推して一応日本からであると言いつけることも出来る。然し蕨手等独特のものがあると言いつけることを逆に考察して見ると、これも北方大陸から直輸入した別の文化が、既にこの地域に存したものと見る前述の見解を更に再認することになる。それを齎らしたものが、ギリヤークであつたか、オロツコであつたか、或は古い樺太アイヌの中へ入り込んだ、行商の如きものの手によつてであつたか、今は全く疑問ではある。

この時代の遺跡についてであるが、オホツク式土器遺跡のうち、東、西タライカと、鈴谷(北) 及同(南) 貝塚には、貝層のあり方に類似点が見られる。即ち海岸に広く、長く貝殻が堆積していると言う点である。これも多分刻文土器の最末期に属する特徴であろう。それ以前のオホツク式貝塚は、それに似て稍小形のものであるのではなからうか。堅穴もこれに附属しているらしいが、その両者の特質の差は不明である。凡らく堅穴住居と、その附近に一定の大きな貝捨場のあつたことは考えられる。又オホツク式の遺跡が貝塚が多く、海岸を余りはなれていないことも注意し度い。動物の遺骨でも、海獣骨(従つて骨角器類)の遽かに増加するのは、やはり金属漁具の使用に起因すると見るべく、その他クマ、アカオ、カミ、シベリヤオ、カミ等猛獣に類するものの捕獲も、また金属器に負うものではなからうか。下顎の曲つた小型の所謂アイヌイヌと、直線的な大型のシベリヤイヌの雑種も生じたと言う(文獻^{52a})。夫とトナカイは櫛の索引に関連するものとして、やはり最後の段階に所属するかと思われ、例の所謂カラフトブタも、同じ金属器時代の所産と見てよからう。骨角器では先ず稜のある銛、金属器を装置する仕掛のある一切の銛、燕尾形等取りはずしの自由な結合漁具と、鋏引き銛は、(註1)これも悉く後期のオホツク式土器文化の所産であらう。

註1 鋏引きは或はその前にも存するらしい。

最後に本斗南浜町貝塚出土の鯨骨製鍬（二個）も問題である。喜田博士の農具を、馬場脩は堅穴つくりの道具と言つて簡単に形付けているが（文獻56—五四頁）、彼等が純然たる漁狩獵民であつたとする確たる証拠もない。むしろ簡単な農業を営んでいたと見る方が自然であらう。ただそれも恐らく金属器文化に伴伴するものであらう。日本の縄文文化圏では、いつから農耕が開始されたか非常に問題であるが、彌生式文化以降に、イネの農耕が開始されたと言うのが先ず定説である。樺太方面では、土師に平行するオホツク文化の、その後半に農耕がはじまつたと見ると、時代的に相当の開きがあることになる。農耕法の発達も、その理由は別として非常に遅速があつたようである。それに耕作したものも勿論イネではなく、ムギ、ヒエ、アワの類であつたと思われる。が、遺憾ながら物的な証拠はない。石庖丁も打製の石庖丁様石器で、農業と直結した彌生式の石庖丁と同類と見なすことも出来まい。又、この農耕手段が、日本から伝わつたか、大陸系かが問題になる。然しこれも日本からよりは、大陸方面からする公算の方が大きいように思われる。（勿論初源ではなく、その後の長い経過のうちには、ある技術、ある種子が、日本方面から侵入したことを否定するものではない）。明治初年頃、北海道アイヌは実に幼稚な粗放農耕段階にあつた。樺太アイヌでも勿論同様で、しかもその最初の状態は、想像に余るものがある。それにも拘わらず、金属器文化の方は相当優秀なものがある。

東タライカ貝塚からは本邦製の堅耳の鉄鍋、刀子、金具の附いた櫛の一部等が出ている（文獻56—八七乃至八八頁）。鈴谷（北）貝塚に石炭製の飾玉が、人骨と伴出した位だから、本斗南浜町貝塚の硝子製、瑛瑯質製、珊瑚製の玉類、或はその他の装飾品もオホツク文化所屬と見てよからう。所謂山丹物の輸入を別として、それは相当の文化段階に達したのである。原始農耕を取り入れても、本質的には石器時代の自然経済段階を彷彿し、利器のみが金属器へ移行したものである。^{註1}蓋し、農耕を繰り返す年毎の期間も短く、技術も困難で、彼等はなお相当漁狩獵に重点を置かざるを得ないと言

註1

清野謙次博士の如く、この種の状態を鉄様時代と呼ぶのも便利である。然しオホツク文化のはじめは石様時代（文獻20—二五六頁）でなく、石器時代である。

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

今一つ東タライカ、西タライカでも、又ススヤ（北）及ススヤ（南）貝塚でも貝層中にカキの甚だ多いことは注目し値する。貝塚の附近の堅穴に附属する貝層にはホタテカイのみでカキはでない。カキは鹹度の低い場合によく成育するのであつて、この時代が多湿期、即ち雨量の特に多い時代であつたことが推測される。但し日本本州の如き温帯では、それを直ちに暖期と結合して考えることが出来る。だが樺太の如き中部ヨーロッパと同じ高緯度地帯では、多湿の寒期もあり得るから、軽々に論断は出来ぬ。特に花粉分析例も、フロラの研究も、窺聞にして実例を知らぬ。然しオホツク式文化が、アリニューシヤン、カムチャツカから北海道迄、相当広範囲に分布している状態から強いて考えれば、すくなくとも樺太的オホツク式が頂点に達した頃、この人種は決して萎縮した人びとでなく、活潑な海洋民族であつたことが想像される。そしてカキが一層暖い地方に属する貝類であることも併せ考えて、日本内地と同様多湿、高温の時代であつたとは言えぬであらうか。但しそれは寧ろ樺太のオホツク式の古い方の時期で、その継続期が何百年であつたか、又それが日本史の中世のどの頃に当るのか、今後にのこされた問題である。

最後に内耳土器の文化期である。この文化の遺跡は各河川に沿うて奥地迄分布しており、貝塚を伴ふものが多い。貝塚にあつても、この時期の貝塚か否か不明瞭で、唯その期の遺物が貝層中に混入したと疑われるものもある。（例えば鈴谷（北）貝塚出土の硝子瓶の破片の如きもの）。内耳土器は日本内地のその類の土鍋が起源であると見る向きが多い。そして終末は間宮倫宗の「北蝦夷図説」と、それより半世紀後の鈴木茶溪の「樺太日記」の間であるとされている。前者にこれを現用している記載があり、後者には発掘したとしてあるからである。純粹に内耳土器のみの時代もあり、山丹物の伴う時代と、ロシヤ陶器の伴うものがあるらしい。上述の金属器の大部分がこの時代のものである。但しロシヤ陶器の時代は、又純粹に、その後にく一層近い時代のものらしい。そしてその堅穴に伴う若干の貝塚もあるらしいが、それを明確に調査した記録はなさそうである。

以上を要約すれば、遙か古い時代に、大陸方面から樺太へ、人類が渡来した可能性は否定出来ない。原アイヌ族と思

われるものが世紀前後にこの地域に來住した記載があるとも主張されている。唯最初にこの地で製作された土器は、日本と別の樺太式縄目文土器で、後北式もあり、祝部土器もあるが、之等は流伝したものでこの土地で作製されたものではなからう。樺太式縄目文土器に続き、この地方独自の文化を表徴するものはオホツク式土器である。（この文化の起源は予想以上に古いのかも知れない）。樺太のオホツク式には時間的に、前期、後期の二時代があり、空間的にも、北海道と明確に区別される。このオホツク式の後期は、相当金属器が重用され、原始農耕も開始されたかに見受けられるが、生業の重点は、漁狩猟に置かれていた。大陸文化は日本からの北上文化と相並んで、絶えずこの地域に流入し、最後には当時の帝政ロシア帝国文化の洗礼を受けた。然しこの最後の方の段階は、堅穴、チャシ等の発掘調査によつて明かにさるべきもので、独り貝塚の資料のみによつては論じられない。

いづれにしても貝塚資料から觀た南樺太の文化はオホツク式を主とするもので、その前後を通觀しても、日本の内地の文化とは一応別個の、別系統の文化と考えるのが至当である。

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

第二表 樺太の貝塚出土資料 土器形式別概表

内耳土器	土器式		樺太式 縄文土器	土器	土器	遺跡及自然遺物	備考
	オ 土器	ホ 抑型文 土器	ツ 刻文 土器	ク 式文 土器	縄目文 土器		
(石ランプ、煙管頭、 山丹玉)		磨製石斧、打磨製石 斧、打製石斧、石鏃、 磨製石鏃、石槍、石 七、石ナイフ、打製 石庖丁、砥石、管玉、 小玉(琥珀、硝子、 瑠璃、珊瑚)		磨製石斧、各種打製 石斧、蛇文岩製石鏃、 石鏃、石錘	打製石斧、蛇文岩製 石鏃(多)、凝灰岩製 石七様石器		
マキリ鞘、刀子柄、有孔 骨板、鯨骨製環、牙製環、 象牙環、櫛部分品		各種牙製裝飾品	各種牙製裝飾品	各種牙製裝飾品	骨鈎、鯨骨製品多数		
櫛部分品、鉄製刀子、 磨耳等の鉄鍋、金属 製カスガイ (日本刀、貨泉各種)			小刀子、骨角器着装 用銅板				
主として堅穴に附屬 する小貝塚堅穴内貝 塚 貝はホタテガイのみ			大なる貝塚貝層の 上層、 同じくカキ多し?		大なる貝塚貝層の 中層 カキ多し	大なる貝塚貝層の 下層	
(一) 付は純金属文化 よりの混入、或は堅 穴出土品							

V 文 献

- 1 石田收藏 (S・I) 「飯島教授の樺太みやげ」 人誌二二―二四五、四三四―四三六頁、鈴谷 (南) 貝塚。明三八・八
註1 人類学雑誌の略
- 2 (石田收藏) 「口絵につきて」 (石田氏よりの来信) 人誌二二―二四七、三四―三五頁、鈴谷 (南) 貝塚。明三九・一〇
- 3 下斗米秀次郎 「南樺太調査」 人誌二二―二四九、一〇四頁、鈴谷 (南) 貝塚。同頁、鈴谷 (北) 貝塚。明三九・一二
- 4 石田收藏 「樺太貝塚に発見せられたる動物の残り物」 人誌二二―二五〇、一六三―一六五頁、鈴谷 (南) 貝塚。明四〇・一
- 5 野中 (元二) 石田 (收藏) 「坪井教授の樺太調査」 人誌二二―二五六、四三三―四三四頁、鈴谷 (南) 貝塚。明四〇・七
- 6 「坪井教授の消息」 人誌二二―二五七、四七四―四七五頁、鈴谷 (南) 貝塚。明四〇・八
- 7 「坪井教授の帰京」 人誌二二―二五八、五一五頁、鈴谷 (南) 貝塚。五一五頁、トブシ (貝塚)。明四〇・九
- 8 「例會」 人誌三三―二六二、一二一―一二三頁、鈴谷 (南) 貝塚。明四〇・一二
- 9 神保小虎 「樺太にありし博物館」 人誌三三―二六四、二二二頁、鈴谷 (南) 貝塚。明四一・二
- 10 坪井正五郎 「カラフト石器時代遺跡発見の鳥管骨」 Ⅰ、Ⅱ及Ⅲ、人誌三三―二六三、二六四及二六五、一五六―一五七頁、二〇四―二二一頁及四七四頁、鈴谷 (南) 貝塚。明四一・四
- 11 石田收藏 「樺太紀行」 Ⅰ、Ⅱ及Ⅲ、人誌三三―二六五、二六六及二六七、二五七―二六六頁、三〇二―三〇五頁及三四一―三四七頁、鈴谷 (南) 貝塚。明四一・六。
- 12 坪井正五郎 「カラフト発見の鳥管骨に似たもの」 人誌三四―二七一、三六頁、鈴谷 (南) 貝塚。明四一・一〇
- 13 坪井正五郎 「東京人類学会創立第二十四年事業報告」 人誌三四―二七一、四頁、鈴谷 (南) 貝塚。明四一・一〇
- 14 大野延太郎 (雲外) 「先住民製作の土器文様の分子に就て」 人誌二七―九、五三〇頁、鈴谷 (南) 貝塚。明四四・一二
- 15 Kishinoue, K. "Prehistoric Fishing in Japan" 三六五―三六六頁、鈴谷 (南) 貝塚。明四四

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

16 Nishimura Shinji "On the boat of the Koro-pok-guru in the legend of Ainu" 人誌三三・一六、一八四頁、鈴谷(南)貝塚。

大六・六

17 地名表^{註1}Ⅳ、四五五頁、東タライカ貝塚。同頁、鈴谷(南)貝塚。大六・一二

註1 人類学教室「日本石器時代人民資料発見地名表」第Ⅳ版の略

18 松本彦七郎「海馬島産海馬銛」人誌三四・一二、五一頁、藻白貝塚。同頁、北古丹貝塚。同頁、南古丹への途中貝塚。大八・二

18a 八幡一郎「石鏃を附加する骨銛」人誌三九・一二、九五頁、北古丹貝塚。大一三・二

19 「會員消息」人誌三九・九、三〇五頁、鈴谷(北)貝塚。大二三・二〇

20 清野謙次「日本原人の研究」二三三頁、鈴谷(南)貝塚。二三三頁、二三四頁、二三五頁、二四五頁、二五六頁、二五九頁、鈴谷(北)貝塚。大一四・四

21 直良信夫「樺太本斗町発見の遺物に就いて」^{註1}考誌一六・四、二五四頁、北本斗貝塚。二五〇―二五九頁、二五八頁(地図)、本斗南浜町貝塚。大一五・四

註1 考古学雑誌の略

註1 考古学雑誌の略

22 大坊善章「樺太本斗郡遺跡」人誌四一・一五、二五四頁、遠節貝塚。同頁、北本斗貝塚。同頁、本斗大通貝塚。同頁、吐鯿保貝塚。同

23 北内幌貝塚。同頁、内幌貝塚。同頁、藻白(貝塚としてない)。大一五・五

24 長谷部言人「本輪西貝塚の鹿角製銛頭」人誌四一・一〇、四七二頁、藻白貝塚。大一五・一〇

25 清野謙次「日本石器時代に関する考説」民族二一六、九八九頁、鈴谷(北)貝塚。昭三・九

26 地名表Ⅴ、五一六頁、東タライカ貝塚。五一四頁、鈴谷(南)貝塚。四五五頁、鈴谷(北)貝塚。五一五頁、遠節貝塚。同頁、北本斗貝塚。同頁、本斗大通貝塚。同頁、吐鯿保貝塚。同頁、北内幌貝塚。同頁、内幌貝塚。五一四頁、藻白貝塚。同頁、北古丹貝塚。

27 昭三・一〇

28 帝室博物館「帝室博物館年報」(昭二年度)、二三三頁、鈴谷(南)貝塚。昭三・一一

29 平光吾一「千島及弁天島出土々器破片に就て」人誌四四・一七、三八六頁、鈴谷(北)貝塚。同頁、鈴谷(南)貝塚。昭四・七

- 28 中谷治宇二郎「日本石器時代提要」(初版)、二五二頁、鈴谷(南)貝塚。昭四・九
- 29 地名表Ⅴ補 六一頁、北古丹貝塚、昭五・三
- 30 八幡一郎「土器石器」一九一頁、藻白貝塚。同頁、北古丹塚。二〇三頁、鈴谷(南)貝塚。昭五・九
- 30 a 森本有親「北貝塚の遺跡遺物」(博物館報告) 昭五・九(未見)
- 31 河野広道「樺太の旅」人誌四八―五、三〇二頁、鈴谷(北)貝塚。昭八・五
- 32 名取武光「利尻礼文兩島に於ける考古学的調査旅行」史前五―三、一七二頁、藻白貝塚。昭八・五
- 註1 史前学雑誌の略
- 33 杉原莊介「樺太西海岸」ドルメン二―一二、一二頁、本斗小学校々庭貝塚。昭八・一二
- 34 阿部余四男「樺太北貝塚の犬に就いて」日本六六―三、鈴谷(北)貝塚。昭八
- 35 「立正大学考古学会石器時代遺物展覧会目録」史前六―二、一〇四頁、鈴谷(北)貝塚。同頁、江ノ浦貝塚。昭九・三
- 36 「木村信六」木村郷土研究所々報」4」(書評) 考古学五―五、一四三頁、本斗南浜町貝塚。昭九・五
- 37 大場秀夫「樺太鈴谷貝塚人々骨の上肢骨に就て」人誌四九―五、一〇及一二、一九〇―一九一頁、二八九―三四一頁、四九三頁、四九六頁、鈴谷(北)貝塚。昭九・一二
- 38 新岡武彦「樺太亜陸灣沿岸小満別遺跡に就いて」人誌五〇―六、二三二頁(地図)、二三七―二三七頁、胡蝶別貝塚。二三六頁、鈴谷(北)貝塚附近貝塚。二三二頁、鈴谷(北)貝塚。二三二頁(地図)、二三三頁、江ノ浦貝塚。二二七頁(地図)、遠節貝塚。同頁(地図)、北本斗貝塚。同頁(地図)、吐鯤保貝塚。同頁(地図)、内幌貝塚。同頁(地図)、藻白貝塚。同頁(地図)、北古丹貝塚。昭一〇・六
- 39 木村信六「本斗郡先史時代遺物発見地名表」(木村郷土研究所報5) 未見、?頁、遠節貝塚。?頁、北本斗貝塚。?頁、遠節良音間神社貝塚、?頁、遠節2番地貝塚。?頁、内幌貝塚。?頁、宗仁貝塚。昭一〇
- 40 馬場脩「オホツク式土器に就いて」連合大会記事一、一二二頁、鈴谷(北)貝塚。昭一一・一一
- 41 木村信六「樺太本斗町浜町八丁目貝塚調査報告」(木村郷土研究所報6) (未見)、?頁、本斗浜通貝塚。昭一一

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

貝塚資料より見たる樺太の文化とその概観

42 木村信六「樺太の石器時代」ミネルヴァ二一一、三八八頁、鈴谷(南)貝塚。同頁、鈴谷(北)貝塚。同頁等、本斗南浜町貝塚。三

八九頁、東タライカ貝塚。同頁、遠節貝塚。三九二頁、藻白貝塚。昭一二・一

43 木村信六「樺太出土の縄文土器」文化四一三、？頁、遠節貝塚。昭一二・三

44 木村信六「本斗郡先史時代遺物発見地名表」文化四一三、？頁、本斗南浜町貝塚。？頁、遠節良音間柳杜貝塚。？頁、遠節2番地附
近貝塚。昭一二・三

45 直良信夫「日本史前時代に於けるフタの問題」人誌五二一八、二九三頁挿図、東タライカ貝塚。同頁挿図、本斗駅構内貝塚。同頁、
本斗南浜町貝塚。昭一二・八

46 直良信夫「古代日本犬に疾患の多いのは何故か」犬の研究一二、七四一七五頁、東タライカ貝塚。昭一二・一二

47 新岡武彦「再び樺太発見の内耳土鍋に就きて」人誌五三十三、一〇一頁(地図)、一〇三頁、鈴谷(北)貝塚。同頁、鈴谷(南)貝塚。
昭一二・三

48 岡正雄、馬場脩「北千島古守島及樺太東多来加貝塚に於ける調査予報」民族学研究四一三、五二二頁(地図)、第二一図版(貝層)、
東タライカ貝塚。五二二頁(地図)、五四〇一五四一頁、西タライカ貝塚。昭一三・三

49 直良信夫「史前日本人の食糧文化」^{註1}人先講一、一六頁、東タライカ貝塚。昭一三・五

註1 人類先史学講座の略

50 直良信夫「北方文化圏の獣類」民族学研究四一四、六〇〇頁(目録)、六一〇一六二六頁、六二〇頁、東タライカ貝塚。昭一三・一〇

51 齊藤弘吉(弘)「日本民族学会第一回北方文化調査団発掘北千島古守島竪穴並に樺太多来加貝塚出土家犬骨に関する報告」民族学研
究四一四、六八八頁、六八九頁、六九一頁、六九二頁、六九五頁註、東タライカ貝塚。六八八頁、六九一頁、鈴谷(北)貝塚。六八
八頁、遠節貝塚。同頁、本斗南浜町貝塚。昭一三・一〇

51 a 稻生典太郎「オホツク土器以降に就て」上代文化一六、一〇五一一九頁、昭一三・一一

甲野勇「北方調査団考古学班小報」考誌二八一二、八四一八四三頁、東タライカ貝塚。昭一三・一二

- 直良信夫「オホツク沿岸の史前家犬について」犬の研究一四、？頁、東タライカ貝塚。？頁、鈴谷（北）貝塚。昭一四・一
- 大山祐「史前人工遺物分類（第二綱）骨角器」史前二一六、二六八頁、北古丹貝塚。昭一四・二
- 稻生典太郎「樺太の貝塚と遺物」原始文化談話會講演、東タライカ貝塚、榮浜貝塚、遠節良音間神社貝塚、吐鯨保貝塚。昭一四・一一・一七
- 稻生典太郎「オホツク式土器研究の展開」人誌五四―一二頁、五二七―五二八頁、鈴谷（北）貝塚。昭一四・一二
- 馬場脩「樺太の考古学的概観」人先講一七、三三―三七頁、一〇七―一〇九頁、東タライカ貝塚。三七―三八頁、西タライカ貝塚。
- 三七―三八頁、榮浜貝塚。二二―二九頁、一〇七―一〇九頁、鈴谷（北）貝塚。二二―二九頁、鈴谷（南）貝塚。一九―三二頁、本斗南浜町貝塚。八八―八九頁、本斗南浜町貝塚。一九―三三頁、遠節良音間神社貝塚。二三頁、遠節貝塚。同頁、遠節2番地附近貝塚。同頁、本斗小学校々庭貝塚。同頁、内幌貝塚。同頁、藻白貝塚。同頁、宗仁貝塚。昭一五・九
- 米村喜男衛、北橋保夫「オホツク文化圈出土の牙製婦人像」考古学一一一、六五五頁、鈴谷（北）貝塚。六五九頁、本斗南浜町貝塚。昭一五・一一
- 稻生典太郎「樺太榮浜町歡喜寺裏遺跡の石斧」先史考古学一―三、？頁、榮浜貝塚。昭一五
- 酒詰伸男「貝輪」人誌五六―五、二五三頁、鈴谷（南）貝塚。昭一六・五
- 直良信夫「日本産獸類雜話」二四二―二四三頁、東タライカ貝塚。二四三頁、鈴谷（南）貝塚。昭一六・六
- 直良信夫「古代の漁獵」一五六頁、東タライカ貝塚。二二九頁、鈴谷（南）貝塚。昭一六・九
- 長谷部吾人「陰菜加工品」人誌五六―一二、六五八頁。東タライカ貝塚。昭一六・一二
- 直良信夫「史前遺跡出土の獸骨」古代文化一三―二、Ⅷ、一七―一八頁、同二三―三、Ⅶ、二三六頁（第一六圖）、二三六―二三八頁、同誌一三四、Ⅷ、三三―三三頁、同誌一三六、Ⅹ、三五―三六頁（第三三圖）、東タライカ貝塚。昭一七・六
- 八幡一郎「骨製針入」古代文化一四―八、二五六頁、鈴谷（南）貝塚。同頁、本斗南浜町貝塚。昭一八・八
- 大場利夫「オホツクの二つの文化圈」石器時代2、四六―五〇頁、五二―五三頁、ススヤ（北）貝塚。昭三〇・一〇

（一九五五、一一、三〇）